クラウス・ヘルトと私の交友の思い出

小川侃

二〇二三年の十二月八日にクラウス・ヘルトの息子さんのゲオルクからメールが入って、父クラウス・ヘルトが十二月六日に亡くなったと書かれていた。彼は、もともと心臓が良くないと言っていた。その心臓の手術の結果、この世を去ったようである。彼は、カトリック教徒であった。クラウス・ヘルトは、いうまでもなくドイツの現象学会の会長を3期連続で遂行したし、優れた現象学者であり、同時に現象学をつねにギリシャ哲学との関連で考察していた優れた哲学者である。私は京都大学の先生方からよりも、最も多くをクラウス・ヘルトから学んだ。彼は、優れた教育者でもあった。彼よりも十歳以上年上のオランダの現象学者とあるとき話していたら、「クラウス・ヘルトは、教育者として有能である」ということを力説したのは、よく覚えている。

クラウス・ヘルトの著作は、多く日本語にも翻訳されている。主著は、『生き生きとした現在』と『ヘラクレイトスとパルメニデス、そして哲学と学問の始原』であろう。ここでは、彼の哲学の概要ではなく、彼の人柄、教育者としての一般には知られていないことを主に記しておこうと思う。

私が初めてクラウス・ヘルトにお会いしたのは、一九八〇年のドイツ現象学会に招かれたときのことである。このときには、ドイツ現象学会から往復の旅費を出していただいたし、非常に優遇されたと思う。私に与えられた課題は、日本の現象学研究の現状報告であった。私は、単に欧米の現象学の研究をしている日本人ではなく、広い意味での現象学の方向で思索した西田幾多郎だけではなく、とりわけ、独特の観点を提示している梅原猛の視点も報告したと記憶している。会議は、トリアーで開かれたが、その前に、私はこの機会にクラウス・ヘルトにお会いしたいと思い、彼の家にまで行った。

当時彼は、ヴッパタールの南の端、ズートベルクに住んでいた。ケルン大学近くの公衆電話から電話した。すると、ヴッパタール・エルバーフェルトまで電車できて、そこからバスに乗れという指示があり、直接、ズートベルクの家にまでいった。彼は、大変歓待してくれた。昼食を御馳走になり、夕食も御馳走になり、エルバーフェルトの駅まで車で送ってくれた。当時私は広島大学の助教授だった。そのとき私はフンボルト財団の奨学金に応募したいがよろしくとお願いしておいた。

それから二年後私は、ヴッパタール大学にフンボルト財団の奨学生として留学した。私は、ヴッパタールとキールに一年半留学した。私が渡独して、一ヶ月後に家内と娘（当時三歳）がヴッパタールに来た。クラウス・ヘルトは、家内のドイツでも英文学の研究を続けたいという意志を汲み取って、特別に、スウォンさんというヴッパタール大学の専任外国人教師（英国人）を紹介して、授業に参加できるように、授業を聞けるように特別に計らってくれた。娘には市立幼稚園を紹介してくれた。後に姫路独協大学の教授になられた岡田勝明氏も半年位後に来られた。彼は、フィヒテ研究のために、クラウス・ヘルトよりもすこし年上のフィヒテ研究で有名なヤンケ教授のところに来たのであるが、私がクラウス・ヘルトの現象学コロキウムが良い授業だというと来られた。さらに、後に東京大学教授になった中田基昭氏も当時東京大学の教育学部の助手であったが、現象学と教育学を結びつけるために努力されていた。私は、ドイツ留学は、二回目であり、一回目には、ケルン大学のフッサール文庫に留学したのだった。そのときには、ウルリッヒ・クレスゲス教授についた。しかし、彼は正教授ではなかったので、権力も力もなかったのだ。教授という称号は、すべて同じ扱いではない。これも、クラウス・ヘルトが教えてくれたのだが、大学の教員の位階は、C1からC5に区分されているらしい。正教授は、C5である。それを聞いて、ケルン大学のウルリッヒ・クレスゲス教授よりもヴッパタールのクラウス・ヘルト教授の方が重要だと言うことが分かった。たとえば、クラウス・ヘルトの助手だったヒューニー氏は、後に名目上は教授だったが、実は「僕は助手の給与なのだ」と言っていた。こういうことは、ドイツ社会の中に入らないと分からない。

とにかく、クラウス・ヘルトは、非常に親切だった。パウル・マイゼンベルクという大学専属のカトリックの神父さんも紹介してくれた。クラウス・ヘルトの助手のハインリッヒ・ヒューニー夫妻も親切だった。このように私達の滞在は、非常に快適でよかったが、基本は、クラウス・ヘルトのお陰だった。

注目すべきはクラウス・ヘルトの授業の仕方であった。現象学コロキウムと言う名前で、フッサールのテキストを扱っていたが、どのような問いも彼は決して無視することなく、その問いについて考えるということを行った。後に私が「問いと答えの往復運動」と名づける授業のやり方である。（ちなみに、私はヘルマン・シュミッツ教授の授業も受けたが、これは、単にテキストを読んでその内容を学生に問うという

だけのものであった。）更に学生の中に一人か二人、必ず指名して、コロキウムの内容を文章にしておくというやり方を取った。この方法は、プロトコールといわれたが、学生の思考の能力を高め、注意力と文章力を高めると思われる。実際、私は広島大学でも、京都大学の大学院人間・環境学研究科に来てからも、この方法を取って授業をしていた。豊田工業大学での哲学の授業もまさに、この「問いと答えの往復運動」の結果、高く評価された。現在は、江口建氏が教授になっている。この「問いと答えの往復運動」と私が名づけるやり方は、実は、古代のギリシャでプラトンが弁証法もしくはディアレクティケーと言う名前で実行していたものである。今日でも私は学生の何でもない疑問が新しい発想に結びつくことがあると思っている。

日本人は、多くの場合、留学しても、もっぱら同じ日本人や留学生と話をするだけのことが多いのだが、私の場合、幸運だったのは、家内が英文学（エリオット）を研究し、英語を話すのが得意だったことも関係があろう。家内の「クラウス・ヘルト一家との交流」という未刊の覚書を読むと、あるとき、家内が英米系のノリで、「クラウス」と呼んだのがきっかけで、どうもクラウス・ヘルト一家と小川一家がドイツ語で言う duzen する仲になったようだ。家内の手記を読むと、このためには、ドイツでは、腕と腕とを絡み合わせてワインを飲むという儀式がある。クラウスと私は、この儀式を行った記憶がある。あるとき私は、東京大学にいる某氏に、ヴッパタール友の会を作ろうではないかと話しかけたら、横でヘルトさんと duzen する人がいるのに、そういう席では、俺はいやだと言っていた。人間で一番恐ろしい感情は、「嫉妬」であるというマキァヴェリの言葉を思い起こす。

私が京都大学で教えていたとき小川研究室に入ると、「こき使われる」という噂が蔓延していたようであるが、これは、教育的見地から考えるべきなのである。これは誤解である。学生を鍛えるためなのである。鍛えられた学生は、広島大学、東京大学、和歌山大学、別府大学、豊田工業大学等の教授になっている。